

「私がお子さんと美術館に行くこと」について
- 学校現場における連携授業に向けて -

所属校：多摩市立多摩第三小学校
氏名：柴 崎 裕
派遣先：東京学芸大学大学院

キーワード：リアルな学び・学びのつながり・協働・学校の日常性の相対化・教育活動の自覚的更新

研究の目的

1 外部教育資源の授業活用

(1) 地域の美術館の授業活用と連携授業

地域の美術館の授業活用が、図画工作科学習指導要領に明示され8年がたつ。これら地域に根ざした文化芸術体験活動は、子供達に、より「生きたリアルな学び」と「知的好奇心」を提供し、子供達に「既存の知識の組み換え」が生まれ、学ぶ主体へ導くことに貢献すると言われている。このような教育機会と手法は広く「連携授業(コラボレーション授業)」と呼ばれ、近年、教育活動に強く求められているものの、多摩市教育研究会や東京都図画工作研究会の報告(H17年度)を見ても、一般に普及しているとは言い難い。

(2) 自己実践から

自己実践を振り返ると、このような授業構想を図画工作専科(以後、図工と表記)から発信し、学校全体へと定着を図るまでには、様々な課題が横たわっている。それら課題をまとめると次のようになる。

図工専科教師の授業観と連携授業に向けた必要性の充溢、校内への理解・浸透と体制の整備

「学びのつながり<シークエンス>を意識」した授業計画、題材配列のデザイン

外部教育資源の発掘

外部教育資源との相互行為、相互作用と「協働する関係性」へのコーディネート、その方法論
授業の検証と「子供の学び」の検証、普及

2 連携授業のもたらすもの

文化芸術体験活動を成す連携授業は、自己の教育活動に向けた資源を拡充し授業観や学校現場における教育活動の質的転換を促すものであるとも考えられる。本研究は自己の実践活動の検証を土台にし、教育活動に連携授業がもたらすものをも明らかにし、教育現場の「外部教育資源の授業活用」への新たな取組みに貢献するものである。

研究の方法

1 調査研究

(1) 授業研究

都内小学校3校で授業1題材における鑑賞領域の日

常的な扱われ方を観察し、続いて3校の美術館授業とその事前・事後授業を観察した

(2) 美術館授業教員研修会フィールド観察

東京都図画工作研究会、H18、H19美術館研修会(8月)の企画、ファシリテーター、美術館公開授業実践、そのアクションリサーチを行い、国立美術館全国指導者研修会(H18、H19)の企画、ファシリテーター、公開授業、アクションリサーチを行った。

(3) アメリア・アレナス『対話型ギャラリートーク』

岡山県立美術館『MITE!おかやま』展、ナビゲーションスタッフ研修会をドキュメントした。(H18年)

2 文献研究

先行研究を基にして、日本における美術概念の生成過程及び「美術鑑賞」の論理、教育の倫理についての文献研究を行い、本研究における基本的な考えをまとめた。

3 自己実践の検証

調査研究及び文献研究の結果を基に、「国立西洋美術館訪問授業」「パルテノン多摩・美術家：開発好明氏連携授業」を実施し検証を行った。

研究の結果

1 調査研究の結果

美術館訪問授業の多くが何がしかの事前・事後の授業を必要とし、子供達のモチベーションに向けたシークエンスがもたらされ、体験的学習の定着を図ろうとする教師の意図と工夫が、子供に自然な質的変容をうながしていた。また美術館訪問授業ではアメリア・アレナスの『対話型ギャラリートーク』が多く活用されている実態と、その有効性を見ることができた。その授業構想では、より子供達の実態に即した「協働」の過程があり、その重要性が明らかとなった。

2 文献研究の結果

日本の近代化に伴って「制度としての美術」が作られていく過程と、そこから連なる「美術教育の現状」を考察した結果、「体験」と「経験」の識別を受け、その視点から美術教育の教科性が明らかになった。

3 自己実践の結果

調査研究等の結果を土台に、関連実践と自己実践を

比較検討し、指導計画の「流れ・シーケンス」に関心を持ちながら子供の姿を検証した。そして連携授業構想を学校がコーディネートとする上で、外部教育資源に向けたポイントとなる視点が明らかになり、5項目にまとめた。

考察

現在、確実に美術館体験というべき授業の取り組みが始まっている。「美術館を活用する授業」とは、美術館と学校の「連携授業」であり、「体験的活動」である。これら授業の創出は、教師ひとりの小さな動きから始まるが、その先に様々な課題があり、その乗り越えが必要となる。本研究は、私の実践をベースに、様々な課題を掘り起こし、検討・考察を行った。本報告では、そこで到達する授業の構想過程にある外部教育資源との「協働する関係性」の創出と意義について述べる。

1 システムの整備

美術館授業は、学校の体制に支えられ、校内に定着の図られるものでなければならない。

この構想は、学校が他の多くの選択肢から、教育計画をさらに統一的にデザインする視点に晒されている。そのため、学校の「美術館授業の必要性の充溢」というものに期さなければならないものである。

従って、それらを支援するシステムの構築が急務であり、現在、東京都画工作研究会：美術館研修会（H14～）また国立美術館：全国指導者研修会 H18～）が取り組まれている。

2 連携授業の必要性和広がり

現代における文化状況一般が流動的で急速に変化し、価値観が混乱する現状に対する教育課題がある。

近年の日本美術史研究が指摘する「日本美術の自明性の喪失」という事態は、学校と教師の限界を超えた課題である。そこに連携授業の必要性の本質があり、それは美術教育の課題を超え、教育全般において自覚されるべき基本的課題である。

3 連携授業構想過程にある5項目の段階

連携授業は、「子供達の実態」に即して取り組まれることが望まれ、学校の先導的役割が前提となることは明らかである。

また、外部教育資源（以降、外部資源と表記）がもつ「学校にはない魅力」は連携授業の核であり、この両者の「子供達の実態」と「外部の魅力」のどちらも損なうことなく授業構想することが求められる。そのためには、両者が自明とするものの違いを補い、埋め合う相互行為が重要な役割を果たす。

以下は、研究の結果で明らかになった外部資源と学

校をつなぎ授業をコーディネートする上で外部資源に理解を求めるべき項目である。

学級という固有性と連携授業

学ぶ主体となる子供達と連携授業

子供達の日常性と連携授業

指導案の双方向的構築と連携授業

イベント性と連携授業」

連携授業構想は、学校にとって、ことごとく自明なものを整理し、意識的に外部に提示していく必要に置かれ、段階的に共通理解を図り、進展することがこれら項目の背景にある。

学級集団には固有な性格があり、流動的な変化をもつことは、外部にとって意外なほど理解の及ばないものである（ ）。また外部資源がもつ魅力が教材・教具となると、子供の視点でこれらを捉え返す作業は、授業を具体化する上で不可欠な学校の役割である（ ）。これら学校教育の日常的な基底層を成すものと、子供達の実態から、よりよく外部資源の魅力をとらえ返し（ ）必要なコメントを交流する「協働」が、次第に両者を信頼し合える関係性に導き（ ）そのことが子供達の「体験」の質を大きく左右するものとなる。

連携授業は、年に1回～2回程度のピンポイントの授業であり、イベント性をもっている。それによって、子供達の日常性と日々の教育活動は相対化され、新たな視点から世界と自己の読み直しを、子供と教師に迫り、中心的な場である学校は「もう一つのところ」から、日常を振り返る契機を得るのである。しかしその契機をより確かにするには、イベント性から脱却（ ）する必要がある。連携授業を長期的なシーケンスのなかに位置付ける計画性をもち、「外部資源との関係性」をさらに継続的に深めることが求められる。

4 連携授業がもたらすもの

子供達において、連携授業にある人的資源は、「時代に居合わせている」コミュニケーションの可能性から、よりリアルな生き方に触れる機会となり、その体験は、他の多くの文化遺産に宿る作者の「生」に向き合う資源となり、他に替え難い貴重な機会となる。自己実践からは、子供達自ら美術館情報を集め、美術館に出向き、資料を授業に持ち込む者や、美術館の用意するプログラムに定期的に参加する者、学芸員と日常的に交流する者まで見られるようになった。

教師において「連携授業」は、新たな場を得るなかで変容する子供達の姿から、気づきをもたらし、教育活動を振り返り、その自立的自覚的更新を促がす。連携授業は、この時代に必要不可欠な教育の営みである。